〝女性活躍〟で分断された女性たち

ジャーナリスト 竹信 三恵子

衆議院選挙に高市自民党がなぜ勝利したか

今回の衆議院選挙は、本当に顕著な選挙でした。主体になった有権者が政策を考えていくのが政治の原点とすれば、今回の選挙は商品を売るためにＳＮＳ広告を使った選挙でした。高市さんはある意味、女性が活躍する、というリベラルなパッケージをまとった権威主義者だと思っています。序列を大事にするし、天皇制も男系、女系はダメだと言っています。夫婦別姓もそうです。

そういう人が〝なぜ、リベラルに見えたか〟と言うと、従来のリベラルが取ってきたいろんな小道具を意識して身にまといました。まず女性というだけで、従来は反権威主義、自由の象徴、男性支配の打破というようなイメージを持ちます。高市さんは、従来のお金持ちの子弟や東大出身とか、そういう人とは違い中流のご家庭の人という風になっていますから、何となくリベラルなのです。着ているスーツは青、青い色は心理分析でいくと人を落ち着かせて安心させる色だとされているようです。あと笑顔も意識的です。従来のリベラルの旗頭を彼女が全部小道具として使ってパッケージ化し、それを商品としてヒットさせた選挙だったと言えます。リベラルパッケージ化された高市商品を大量のお金を使いＳＮＳにサブリミナル（注）な感じで広告を打った。共産党のYouTube を見ようとした人が YouTube を開けたら、高市広告があり、見たくない人も見るようにパッと出てくる仕組みです。リベラル印の過大包装の商品を大量宣伝広告で売り、実際に多くの若い人が過大包装された商品を買った。40歳以下の人はＳＮＳをたくさん使っています。情報を分析する力のある人は別ですが、多くの若い人が情報被害にあった、ＳＦ商法みたいなものでした。というのが一つの側面です。

もう一つは、従来のリベラルと称している人たちの戦略があまりにも悪かった。イメージ戦略の全く逆行で

す。最初の段階で「中道改革を作ります」と言って並んだ時に、５人の年配男性が出てきて５Ｇ（ファイブ爺）話題になりました。しかも着ている服はみんなドブネズミ色です。ブルーの高市カラーと年配者５人のドブネズカラーは対照的です。自分たちがどう見えているか全く気にしていなかったということです。しかも最悪なのは、選挙の最中に、政策合意の中で〝原発と集団自衛権をＯＫした〟ことがＮＨＫで放送されました。私はそれを聞いて自殺行為だと思いました。そんなことを選挙の最中に、しかもワンフレーズの短い言葉で言うことではありません。

イメージでも政策面でも、負けた野党側にも非があったと思います。

女性活躍のシンボルとしての高市首相

第二次安倍政権は、女性活躍を政策として打ち出しました。私は、女性活躍そのものが危なかったと感じています。女性の人権を強めるべき時に、女性活躍をいきなり持ってきました。女性活躍を、政策として成長戦略と絡めました。女性が働き活躍して、消費すればＧＤＰが上がるというのです。しかしそれは、女性を資源として利用するというものです。女性が資源として利用されるとしても、引き換えに権利の部分の前進があればまだいい。だけど、日本の女性活躍政策は権利の部分は極めて弱かったと思っています。

安倍政権や岸田政権のやったことは、女性の人権や普通の女性が働きやすくする方向にはいっていませんでした。代わりに、昇進する女性を増やすことに焦点を当てました。女性の役員が増えれば、役員会議の意思決定の中で女性の意見が反映されやすくなる可能性はあります。しかし、役員の役割は会社の利益を高めることです。そうした女性が増えても、そこで働いている人たちの待遇にお金を回すことには必ずしもなりません。

女性活躍は、男性中心型の働き方を変えないまま女性に出世を求めました。昇進したら嬉しいと思い、それが女性の地位向上であるように錯覚をさせられてきましたが、圧倒的多数の女性はうまくいかず、一般の多くの女性の待遇は上がりませんでした。

このような女性活躍は、競争に勝てない自分が悪いとする自己責任意識をあおります。これが新しい女性の生き残り方になりました。こうした第二次安倍政権以降の女性活躍の象徴が高市首相です。

置き去りにされた女性の権利

女性活躍政策で権利の部分が弱かった、その象徴が夫婦別姓です。自分で姓を選ぶことさえも認められません。女性が自分で自己決定でき、同姓でも別姓でもいい自分で生きやすいような方法を自分で選べる余地を広げるという選択的夫婦別姓は、高市首相になり頭からダメだと言われてしまいました。

高市さんは、首相を意識してか、夫に姓を変えさせています。つまり、夫婦のどちらかが自分の姓を捨て、家に従属しなければならないのが同姓強要です。それと家族単位で考える。親が子どもの責任を持ち、家長が家のメンバーの扶養責任を持つという家制度です。最近は貧困化も進んでいるし、格差も進んでいます。実際コロナ禍の時は、そうなって家出した若い女の子が大問題になりました。それをみんな家に戻すわけです。そうしたら力がない家で生まれた人は、支えからこぼれます。だから、男女の問題、ジェンダーの問題だけではなく、それから尾を引いて立場の弱い、家に頼れない人を捨てる仕組みで、社会保障のお世話にならなければならない人を捨てるための制度ともいえます。

プラス戦争、戦費の捻出です。家制度の復活をソフトに行うことによって、戦費に税金を使う。女性は性別役割分担で、その担い手になる。一定の好条件があって、人を押しのけてでも頑張りますという人以外は、家族のお世話をしなさいと、そちらに回されます。社会保障は家族の責任になり、戦後、憲法の個人の健康で文化的な生活に、国が責任を持つという理念が、ひっくり返されて戦前に戻ることになります。本来は、人間の普通の生活に必要な社会保障に安定財源は回すべきですが、軍事費に安定財源を回す、逆転です。

本当に女性活躍を目指すのであれば、どんな立場の人も個人として尊重をされて、そこに税金を使って、一人ひとりが自立できるように社会が支える仕組みです。一人ひとりにお金を出せないなら、例えばネットワークやＮＰＯにお金を出すとかして、一人ひとりを支える仕組みが必要ですが、高市政権ではそれが出来ません。

不安定雇用で働く女性と、女性運動

安倍政権の時に「女性に働いてもらうために保育園を増やしましょう」という政策もありましたが、保育園の株式会社化を進めました。会社として利益を優先すれば、子どもにかける費用が削減されます。国の税金が会社を経由して会社や株主に流れて、全部が子どもにはいきません。保育士の定数に対して処遇改善加算をする政策もありましたが、良心的な保育所は子どものために保

身分がわからないように「覆面」をして、切実な心情を訴えた会計年度職員。3月4日、緊急院内集会で

育士の実人員を増やします。でも政府の処遇改善加算は、保育士の定数分しか出ないので、運転手や他の職種には回りません。

私がなぜ非正規雇用問題に取り組むようになったのかは、非正規雇用の問題は一般の人に理解できにくいからです。非正規の人たちの多くは、自分の身元が分かってしまうのが怖くて声をあげたり組合をつくったりできません。例えば、自治体の会計年度任用職員は、制度が「会計年度の一年の職」と法律に書いてあり、何をやっても一年が壁になります。公務員の育休制度も作りましたとなっても、一年の職、一年契約ですから年度を跨いだら育休を認めない例が相次いでいます。

しかし、ネットワークなどで繋がり構造が分ってくると、自分たちが悪いのではなく、被害者だと思えるようになってきました。何人かで人事評価について情報公開請求をして、公的情報ではなく個人情報請求の手続きをして、出てきたものはなぜその点数かというところは全部黒塗り、もう一人もやっぱり黒塗りでした。そうすると相手の方に隠さなければならない理由があるのだと思い始め、自分を責めないですむようになります。仮にそこで任用がダメになっても、落ち込まないし自信喪失になりませんし、壊れないです。

３月４日緊急院内集会「危ない！　非正規公務員の人事評価」を開催しました。会計年度任用職員の方には、顔が分らないように紙袋を被って発言してもらいました。ネットワークでつながった人たちが、会計年度任用職員の構造が分って集会にも参加するようになってきました。今もオープンチャットで、みんなで相談し合っています。井戸端会議みたいなのを作って今１００人までいきました。このような、声を出せない女性たちの声を出させる場をつくり直すことこそ、女性の人権と活躍への第一歩です。私は、女性運動はこれを目指して一からの出直しの時期だと思っています。そのために、ネットワーク等での繋がり方の工夫から始めなければと思っています。

（たけのぶ　みえこ）

＊インタビューを編集部が再構成しました。

注：映像や音声に、通常の視覚・聴覚では捉とらえられない速度・音量によるメッセージを隠し、それを繰り返し流すことにより、視聴者の潜在意識に働きかけること。